

風 吹 山 の 植 物 採 集

大 木 正 夫

本会の第78回例会は、昭和55年8月30・31日、北安曇郡小谷村、風吹山で、植物採集会として行なわれた。参加者は奥原弘人、大塚孝一、小口好久、尾台喜貞、上条重利、草間勉、小林富雄、斉藤定美、春原弘、田中茂、豊国秀夫、豊国やなぎ、馬場多久男、平林陸男、古谷義人、古谷芳枝、渡辺隆一の諸氏と幹事大木の総勢18名で、地方の採集会としては盛会であった。

第1日（8月30日）。あいにく雨天であったが、翌日参加の申し出のあった者および馬場氏を除いて全員夕方までに、電車またはマイ・カー利用で、小谷村来島の国民宿舎風吹荘に集合した。夕食事には、自己紹介を行ない、多少のアルコールも手伝ったのか、楽しい歓談が続いた。夕食後部屋を移して、植物学四方山話に花を咲かせている内に、馬場氏も来荘、話の中に入る。

第2日（8月31日）。昨夜来の雨は仲々止まず、

出発時間を少しおくらせたが、結局、雨の中を会員の数台の車に便乗させて貰い、車道のある限り車で入り、後は雨傘、レインコート、ビニール・シートなど各自持参の雨具をつけて採集を始める。夏も終りに近かったので、アキノキリンソウ、コウゾリナ、カワラハハコなどキク科植物の個体数多く、キツリフネは花が咲き切った感があった。ムシカリの未だ黒くなる前の濃紅色の果実が、ひときわ目立って美しく、皆、代わる代わるシャッターを切った。強雨のため途中で引き返し、風吹荘に戻って昼食。宿で用意して貰った弁当の他に、ビールやそばを特注する人もいて、多種多様な食事を終えて散会。帰途有志の者が小グループを作り、白馬村親海湿原と、大町市居谷里湿原を見学した。親海では木道沿いに、アケボノソウが満開であった。居谷里は、北限のハナノキを見るのが目的で、雨の中をぬれ乍らハナノキを数本探し当てて感激した。

横 内 斎 さ ん を 想 う

清 沢 晴 親

横内さんの逝去

横内さんは、教職に34年、京都大学木曽生物研究所勤務18年、計52年という長い公務員生活の間信州植物の研究家として県内各地の山野を跋渉され、退職後も御病氣をおして、御子息や御夫人の内助で溪谷に又高山にと歩を進め、植物を手にし眺め、かつ愛し続けられた。一方、家にありては、読書や原稿執筆等々、規則正しい日々を送られ、特に晩年は信州植物の由来や、随筆などの著作を成されるなど、その業績は驚くべきものでした。ところが1980年9月13日、老衰のため85才という御高齢ではありましたが、この畏友を失ない、一人哀悼の情を深くしております。

御葬儀は菩提寺である広田寺に於て厳かに執行され、今は生地東筑摩郡四賀村会田の地で、

瑞宝院草木愛斎禅清居士

として安らかに永眠なされておられます。

墓碑には次のように彫まれている。

「独学で植物分類地理学及び陸水学の研究、山野巡

歴七十余年、新植物、八十六種発見、信毎文化賞、知事表彰、勲五等瑞宝賞授、両陛下、皇太子同妃殿下の植物の御案内」

横内さんと植物、その他

横内さんの最後の著「山野巡歴」の補遺の中には「私をめぐる人々」として250余名の方々の名が挙げられている。あまり植物もやらぬ私も、光栄にもこの内に入っています。

「英雄は時代をつくるとか、逆に時代は英雄をつくるとか」いう言葉が有りますが、横内さんにはこんな一面があったでしょうか、あるいは、信州教育というものの何かを反映していたでしょうか。「山野巡歴」中の著者略歴を拝見しますと、教職生活34年（1911～1944）勤務学校数13校、この範囲は、南安曇郡・諏訪郡・上伊那郡・西筑摩郡（現木曽郡）・下高井郡・松本市・東筑摩の諸郡市にわたっていて、県内の植物の分類分布の研究には極めて好都合であったと想像できます。そして当時は、信州の教育会には、矢沢米三郎・河野齡蔵の両植物研究家が